



毎年 7月は「社会を明るくする運動」強調月間、再犯防止啓発月間

毎年この時期に“社会を明るくする運動”的一環として学校の校門付近で生徒会のみなさんと地域の更生保護相談員の方々と一緒にチラシ等を登校中のみなさんに配付して意識を高める取組を行っていましたが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、校門付近での配付は取り止めになりました。

ただ、「大切なことなので資料等を学校でお配りください。」と託されましたので担任を通して過日配付しています。社会を明るくするには、まず、自分が明るさを無くさないことが大切です。悲しさ、苦しき、どうしようもない時も人生にはあります、そういう中でも希望を失わない生き方をしたいものです。苦しみの中から光を見いだした中学生の作文を裏面に載せています。



先生たちの参観授業がありました

生徒のみなさんの学力が高まる授業ができるように、先生たちも「勉強」をしています。今年度、二番目に参観授業に取り組んだのが3年担任の古門先生です。7月3日(金)にありました。村教育委員会の合志指導員に来ていただきて3年1組の英語授業(少人数)を見てもらいました。グループ活動の時には村教育委員会から全生徒分いただいたアクリルパーテイションが役立っています。「日本文化について5文以上の英文を書くことができる」という目標の授業でしたが、日本文化の紹介が英文で上手な人も多かったです。それに対して英語で質問し、英語で回答していました。「おー」という驚きの声や、内容を理解しての笑顔がある授業で、「しっかり理解し、表現できている生徒がいるな」と実感できました。先生たちも頑張りますので、生徒のみなさんも、どんどん、このような授業を積み重ねてください。

(3年1組 授業風景です)



7月は他にも14日(火)に古賀先生の技術・家庭の授業がありましたが、私が学校にいませんでしたので写真がありません。すいません、紹介だけします。

さすが先輩、教育実習生 千々和 遊木 さん

6月29日(月)から本日7月17日(金)までの3週間、本校に現在大学4年生の先輩がやってきました。将来、教育に関わる仕事に就くという夢に向かっての教育実習です。3年2組の峰先生のクラスで実習を重ねました。先生からのメッセージです。「朝や廊下ですれ違った時、あいさつをいつもしてくれて、とても元気になりました。授業をするのは初めてでしたが、1人ひとりしっかり考え、授業に参加してくれて感心しました。これからも頑張ってください。」

みなさんも、将来の夢が見つかるといいですね。



(授業風景です)

「私を見て」

中学生の部 最優秀賞 法務大臣賞

友達のハンカチを隠したことがある。それは小学校低学年くらいのころだ。当時極度の人見知りだった私は、クラスメイトとまともに話すことができず、いつも一人ぼっちだった。時々話しかけてくれる子は何人かいたが、私が「うん」しか言えないことを知ると去っていく。自分が変わらなくてはいけないことは分かっていた。だが、あまりの孤独に耐えられず、周りの同級生を敵視することでなんとか自分を保っていた。

「何の本読んでるの？」

ある日の休み時間、いきなり声をかけられた。戸惑いながら本から目を離し、相手を見上げる。驚いた。そこにいたのは、いつも一人でいて大人しめの、私の鏡のような女の子だったのだ。私はいつも通りの人見知りを発揮し、不愛想に、読んでいた本の題名を告げた。そこで会話終了、のはずだったのだが、どうやら本の趣味が同じだったらしい。この本がいかに素晴らしいかということを色々と語った後に、友達になろう、とまで言ってきた。私は相変わらずうなづくことしかできなかつたが、とびあがりたいほど嬉しかつた。もう、一人にならないですむ。私には彼女が天使様のように見えた。

それからどんどん仲良くなつていき、彼女にだけは何でも話せるようになつた。あんなに苦しかつた昼休みや移動教室の時間が、一番幸せな時間へと変わっていく。

「進級しても同じクラスになれるといいね。」

私たちはそう、語り合つた。語り合つたのだ。

前兆はあつた。昼休みになつて、いつも通り一緒に図書室へ行こうとしたら、教室に彼女の姿がないのだ。先に行つてしまつたのかと思って急いで向かい、図書室の窓から中をのぞきこんだ。彼女は、知らない女の子と仲むつまじげに話をしていた。心臓がドクンと跳ね上がる。大丈夫、きっと今日だけだ。そう自分に言い聞かせながら、足早に教室へ戻つた。しかしその日から、彼女の態度は急によそよそしくなつた。一人でいる時間がどんどん増えていく。まるで、あなたなんか存在していないのよ、と言われているようで、ものすごい恐怖が私を包んだ。嫌だ、行かないで。私を見てよ。もう、耐えられなかつた。気がつくと、私は彼女がお気に入りだと言つたハンカチを手にし、ポケットにつつこんでいた。これまでまた、私に興味を持つてくれるかもしれない。また一緒にいられるかもしれない。頭はそのことで一杯だつた。

少し前まで私の「友達」だったはずの人は、泣きながら私のことをにらんできた。担任の先生はしきりに、どうしてこんなことをしたのか、とたずねてくる。わからない。もう、何もわからない。ただ一つ明確なことは、また一人になつた、ということだけだ。私は、いつのまにかしわくちゃになつたハンカチを彼女に返し、三回ぐらい「ごめんなさい」を言った後家に帰つた。予想通り、玄関には母が立つてゐた。どうせ怒られると思ったから無視して通り過ぎようとすると、急に抱きしめられた。母が泣いてゐる。わけがわからなくなつて、思わず私も泣いてしまつた。

「母さん、唯のこと大好きだから。だから、大丈夫。」

母はそんな照れ臭いセリフを、私に浴びせるように言い続けた。何が大丈夫なのかはよくわからなかつたけど、なんだか私の心は軽くなつた。明日、心をこめてちゃんと謝りに行こう。そして、話したいことを話そう。私は深く、そう思った。

なぜ人は罪を犯してしまうのか。私は孤独が原因だと考えている。人は寂しさに弱い。なのに、必死でその気持ちから目をそらしてしまう。そうやってたまりにたまつた孤独感が、人を誤った方向へと導いていくのだ。だから私たちは、被害者の悲鳴だけでなく、加害者が必死であげた悲鳴にも耳を傾けなくてはならない。その悲鳴を無視したが最後、人はまた「孤独」という名の重圧に押し潰され、「加害者」へと姿を変えてしまう。そんなこと、絶対にあってはならないのだ。

私たちはもっと、お互いを気にかけるべきなのだと思う。困っている人を助けたり、一人でいる人に声をかけたりするなど、小さな努力を一人一人が積み重ねていけば、人の輪は必ず生まれる。そして孤独を感じる人は減つていき、犯罪や非行もなくなつてゆくのだ。

私は、母に救われた。あの時母が私のことを見てくれなかつたら、同じ過ちを繰り返していただろう。私も誰かのために涙を流し、あなたは大切な存在だから、と優しく伝えることのできる人になりたい。そして、心から願う。この世から犯罪や非行がなくなり、全ての人が手を取り合える「明るい社会」を。

心のハーモニーが奏でられた結果だと思います。